人権文化の花を咲かせよう

「人権」、それは野に咲く花のようなものだと思いませんか。野原にいっぱい咲き誇る花を見ると、とてもすがすがしい気持ちになります。でも、その花が誰かに踏みにじられるとしたら、それはとても悲しいことです。私たちは、自分らしさの種をたくさん持ってこの世に誕生しています。その種が差別や偏見で踏みにじられることなく、自由にのびのびと花を咲かせていく…。今月号は、そんなまちづくりを進めるグループにスポットを当てました。

劇の最後にコーラスグループ・小松フリューゲルコールと西条東中学校合唱部も加わり、人権の歌「輝く未来へ」をみんなで歌いました。

「仲間」と共に「闘える」地域づくりを

昨年12月5日、小松公民館で「差別をなくする市民のつどい」が開催され、その中で劇団・プロジェクト２００８（野村幸男会長）による人権啓発劇「未来（あした）へ」が公演されました。

「プロジェクト２００８」は、２００２年に市内の教員が中心となって結成された市民有志のグループで、10代から70代の幅広いメンバー約40人で構成されています。

「未来へ」は、地域で実際にあった出来事を取材や学習を通して構成されたもので、高齢者介護、ひきこもり、部落差別など、社会のさまざまな問題を取り上げています。

「私たちの劇はフィクションじゃないんです。もとは現実があって、そのうえでシナリオを作っている。現実にあることを明らかにとらえながら人権啓発をやっていくべきではないかと。そういうことを考えて我々は活動をしているのです」と会長の野村さん。

今回の劇のテーマは、「仲間」と「闘う」。仲間と手を取り合って、現実に存在する差別をはじめとしたさまざまな問題と向き合える地域づくり「地域コミュニティ」の形成を唱えます。

「人の世話になることは恥ずかしいことではないんです。助け合うということは、すばらしいこと。そしてまた、助けられることがあったら助けの手を差し延べていけるような仲間づくりが大切ですね」

劇中のセリフの中に「闘わな！」という言葉がたくさん出てきます。

「逃げてたんじゃいかん。どうしようもないから逃げるのではなくて、どうしようもないから仲間と一緒に取り組んでいくんです。今回の劇では、そのことを皆さんに知っていただきたい。そして一緒に闘える仲間になって欲しいと思っています」と野村さんは熱く語ってくれました。

▲雪江（写真左　木村さん）の「仲間」という言葉に勇気付けられる泰三（写真右　野村会長）